

## 林逋（967～1028）

杭州 銭塘の人。字は君復。諡は和靖。

西湖の孤山に廬を結び二十年市に出でず。

時人、梅妻鶴子という。「林和靖詩集」三百餘篇が残る。

1) 梅堯臣（1002～1060、35歳下） 七絶→別紙(配布資料 No.5)

2) 蘇軾（1036～1101、65歳下） 「和靖林處士の詩の後に書す」

先生可是絶俗人 先生可（あ）に是れ 絶俗の人

神清骨冷無由俗 神清く 骨冷かに 俗に由（よし）なし

### 蘇軾と西湖

一回目 1071年11月～1074年9月 杭州通判。

1071年12月 孤山に遊ぶ。

二回目 1089年7月～1091年9月 知杭州軍州事。

1090年 西湖に堤を築く。 蘇堤。

## 梅堯臣（1002～1060）

宋の人。 字は聖俞。河南の主簿。後、都官員外郎に至る。

唐書の編集に預かり、詩を以て欧陽脩と交わる。

「宛陵集先生」他

### 欧陽脩の辞

詩の能く人を窮するに非ず。 殆んど窮するものにして、後、工(たく)み也。

「貧しくてこそ、詩上手」

☆ 日常生活を詩のテーマに

☆ 平淡な表現によって、詩の分野を唐詩にくらべて拡大し、宋詩の特色が築かれた。

☆ 嘉祐2年（1057）欧陽脩の知貢举（科挙の試験委員長）のとき、委員として参加。

蘇軾、蘇轍、曾鞏 等が合格す。

☆ 梅堯臣の詩論 44歳の時の作

「宋中道の少(すこ)しく疾みて寄せらるに答う」

詩は本(もと)もと情性を道(い)うも

厥(そ)の声を大(だい)にするを須(もち)いず

方(まさ)に理の平淡なるを聞くべし

昏曉 淵明に在り

また持論として「風月の詩は作らず」を宣言し、

詩は本来「自分の気持ちを素直に歌うべきものである」と主張している。

## 欧陽脩（1007～1072）

宋、廬陵の人。字は永叔。諡号は文忠。

進士甲科に挙げらる。慶曆中、諫院を知し、事を論じて切直。

翰林院侍読学士。枢密副使。参知政事（副宰相）に累官す。

屢々、群少に構えられ、罷黜（ひちゅう）に遭ふも志気自若たり。

王安石に忤（さから）い、致仕して帰る。文名一時に高まる。

政治家、経学者、文学者等、活動は多方面にわたって傑出した存在。

ことに韓愈の古文運動を再提起し、以後古文が主流となる契機をつくった。

唐宋八大家※1 のひとり。

※1 韓愈、柳宗元、欧陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石

◇ 蘇軾らの宋代の重要な人物を発掘、育成した貢績も大きい。

◇ 金石文では北宋末の趙明誠※2 に引き継がれ、金石録 30 巻となり近世学問の展開に貢献した。

※2 夫人は李清照